

対談①

「障害のある学生は人生設計をどのように考え、
どんな支援を必要としているのか」

コーディネーター | 山森一希（大阪大谷大学障がい学生支援室＜アクセスルーム＞）

対談パートナー | 船越高樹（筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局）

障害当事者として

山森 皆さん、はじめまして。大阪大谷大学の山森と申します。

見て分かる通り、私は車椅子ユーザーです。2007年に中学校に入学した時に特別支援教育が開始され、大学3回生の2016年には障害者差別解消法が施行されました。大学生活が始まる前から、修学機会が非常に保障された環境で過ごしてきたと言えます。現在は障害学生支援コーディネーターとして仕事をしています。以前に比べ、支援制度は非常に充実してきましたが、学生が自らの人生を選び取ったと感じられるよう、支援者という他者が勝手にルールを敷かないことに気を付けながら支援をしています。

今日はこの考え方を起点として、障害のある学生が人生設計をしていくために何が必要かといったことを皆さんと考えていきたいと思

います。よろしくお願いします。

船越 対談パートナーを務めます船越高樹です。筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局に勤めております。

これまで、発達障害のある中学生を支援していた時期もありましたが、障害者差別解消法施行のタイミングで岐阜大学に赴任し、学生支援を担当して、今は筑波大学におります。山森さんにはこの後詳しく自己紹介をさせていただきますが、その前に一つ語ってほしいと思うことがあります。今日は、当事者語りをされるんですよね。いったいどんな思いで当事者語りをするのか、その点を先に聞いておきたいと思います。

山森 ありがとうございます。今日の話は、当事者全体に当てはまる話ではなく、あくまでも私の話です。すべての障害学生、あるい



は車椅子に乗っているすべての人たちがこう
思っているんだと思われるのは非常に不本意
なので、そこだけのご留意いただけたらと思
います。

まずは、これまでの経歴をざっとお話しする
と、小中高は地域の学校で学び、その後大学
に進学して大学院まで進み、卒業して、筑波
大学のヒューマンエンパワメント推進局で支
援業務を経験し、大阪大谷大学に移り現在に
至ります。

社会状況も話すと、先ほども少し触れました
が、2007年の中学校入学と同時に特別支援
教育がスタートしました。2012年の大学受
験の時には第一次まとめ（障がいのある学生

の修学支援に関する検討会報告（第一次まと
め）が発表され、2016年に教育実習にいく
タイミングで障害者

差別解消法が施行されました。大学院に進学
したタイミングでは、公務員の雇用率の水増
しが発覚し、博士後期課程の頃にちょうどコ
ロナ禍になりました。2024年に大阪大谷大
学に着任しますが、このときに改正障害者差
別解消法が施行されます。

すみません、スピードが上がっていくと関西
弁になってしまうので、スピードを上げずに
頑張っていきたいと思います。

船越 僕は東京出身ですから関東弁になって

しまいますが、
ここは山森さんのホームタウンでもある関西
なので、ぜひそのまま話してほしいなと思
います。

高校選択の心残り

山森 今日は大学生活の話がメインになるの
ですが、その前に高校受験の話をして
私は小中高とずっと地域の学校に通っていた
ので、当然、高校にも進学すると思っていま
した。

通える範囲には二つの高校がありました。A
高校は学力的に余裕で入れる高校でエレベ
ーターがありました。もう一つのB高校は、学
力的にはちょうど良い高校ですが、エレベ
ーターがありませんでした。

非常に悩んだのですが、私はA高校を選びま
した。受験してB高校に落ちてA高校に行く
のなら納得がいくのですが、そうではなく、
エレベーターがないからA高校に行くことを
選択したのが、その後ずっと心に残り続けま
した。

船越 大阪は人権教育が盛んでさまざまな取
り組みがあると思うのですが、高校に入るま
でのことにも触れていただけたらと思います。

山森 そうなんです。この関西という地域は、
人権教育が非常に盛んな地域です。なので、
障害のあるお子さんが通常の学校と一緒に学
ぶのもそれほど珍しいことではありません。
そんな地域ですずっとみんなと一緒にやってき
ました。ちょっと大変だなと思うことも、み
んながやっていると思って一緒にやってこれ
た。そうして高校受験を迎え、先ほどの選択
をしました。

船越 ご家族はどんな様子だったんですか。

山森 母は、私が高校にいくなんて思っても
いませんでした。だから、高校に進学する
ときはすごく驚いていました。

話を戻しますが、進学先の高校を決めたとき
に、もう一つ考えないといけないことがあり
ました。通学をどうするかということです。
高校にエレベーターはあったのですが、バス
に乗らなくてはいけませんでした。それに、
踏切を渡らないといけなかったんです。

車椅子ユーザーにとって踏切は大変で、タイ
ヤが線路に挟まる事故が年に何度も起きてい
ます。それを知っていたので、途中で踏切が
あると聞いて、「無理やで」と思っていました。
そんなときに先輩の車椅子ユーザーが
「踏切は斜めに渡ったらいけるんやで」と教
えてくれ、「そうやったらいけるんや」と思

って、いくことができました。

大学進学の本当の動機

船越 山森さんは、特別支援学校を経由することなくやってこられたわけですね。大学で支援をしても、特別支援を経ずに来る学生さんは多いです。その結果、当事者の方と話したこともないという学生さんがいます。山森さんはどうでしたか。

山森 私は障害者スポーツをしていたので、多くは中途障害なのですが、めちゃくちゃアクティブな障害者たちを知っていました。でするので、大学に進学するときも、そういう人たちを思い起こして「いける」と思えたということがありますね。

なぜ大学進学をしたいと思ったのかというと、今日は本音を言うのですが、表向きは「特別支援教育を学んで、障害のある子どもたちをエンパワーメントしたい」と語ってきました。でも本当は、「こうやったらできるで」ということを言える人になりたかったんです。それから心のなかで、「お前らはわからんくせに」と思っていたところもありました。

僕の周りには優しい顔をした支援者がいっぱいいました。優しく差別するという言い方が正しいかはわかりませんが、僕がどうしたい

かということよりも、無難な選択を勝手にされる。そういう人にはなりたくないと思っていたんです。むしろ、どうすればできるかということをとと言える人になりたかった。

船越 僕もこれまでこういう仕事に携わってきて、特に20代の頃を振り返ると、優しい顔をした支援者だったのではないかと恥ずかしく思うところがあります。

優しい顔をした支援者とは、具体的にどういう人たちなのでしょう。

山森 勝手に決めてしまう人たちです。体育はできないだろうから見学させるとか、トイレ掃除は無理だろうから他の場所の掃除を勝手に決めるとか。それが優しい顔をした支援者のやることでした。

船越 優しい顔で勝手に決めている。

山森 その通りです。そうはなりたくなかったんです。

ただ、大学は特別支援教育が学べる大阪の国立大学を選んだのですが、国立だし、法律だってできたし、なんとかしてくれるのではないかと思っていたところがありました。

これもはじめてお話するのですが、現役時代、九州にある大学に合格できそうな点数を

取っていました。

高校受験の経験があったので「バリアなんか知るか」という思いはあったのですが、とはいえ、いきなり九州は無理かと思ってしまい、結局は学びたいことだけでなく、距離も考慮に入れて進学先をしたたかに決めました。

これまでとは異なる支援者との出会い

山森 そうですね。そして大阪の大学に進学をします。3月末だったと思いますが、大学から電話がかかってきました。「入学後について聞かせてください」とのことです。

狭い会議室に呼ばれて「何だ？何だ？」と緊張しながら入りました。目の前にすごく怖い雰囲気の人が座っていて、怖いと思ったことを覚えています。

今から何が行われるのかわからない。優しい支援者かもしれないし、そうでないかもしれない。緊張しながら座っている僕に、その支援者は開口一番、「あなたは何がしたいんや？」と言いました。何を言って良いのかわからなかった僕は、「脳性まひで、しかも車椅子に乗って歩けなくて……」と話し始めました。

皆さん、わかりますか。全然かみ合っていないんです。何を言って良いかわからず、僕は診断名から始まる自己紹介をしたんです。こ

れまで診断名を言うと周りが先回りをして動いてくれていたので、自分がどうしたいかと聞かれることもなかったし、考えることもなかった。

だから、はじめてそうしたことを聞かれて何も話せなかったのが、大学に入る前に経験したことでした。

船越 怖いと思ったあたりをもう少し深掘りしていただけますか。その怖かった経験を乗り越えるまでもかなり時間がかかったのではないかと思います。

山森 そうですね。このあと話をしていきますが、いろいろと積み重ねていくなかで変わっていきました。

進学先の大学は山のなかにあるんです。通学が大変でした。多くの学生は、エスカレーターを使って山をのぼって通学をします。あっ、登山をします。階段もあるし、車道を走っていくこともできます。あとバスがあります。私はバスに乗るのが第一選択でした。

でも、バスは本数が少なくて好きな時間に移動ができません。ですので、「車道に車椅子で通れる歩道をつけてください」とずっとコーディネーターに言っていました。でも、お金がかかるわけです。

「なんでつけてくれないんですか！」と言っ

た記憶があるのですが、コーディネーターは「俺だって本当はつけたいけど、でもな……」と言った。でもそのあとに、「実現できないなら別の形でちゃんと実現したらいい」と言ってくれました。これは、「なんとかしてやりたい」という優しい支援ではなく、どうにか障壁を解消できる手段があれば、「俺がこんな形で介入せんでも、あんたは好き勝手に大学生活を送れるのに」と思っていたと、のちにコーディネーターから伺いました。これまで出会ってきた支援者たちは、僕の意思を聞かずに勝手にやってしまう人ばかりだったのですが、この支援者は別の形でちゃんと実現しようとしてくれました。しかも、ちゃんと僕の話聞いてくれる。対話をしながら支援を決めていこうとしてくれている。だから、この人は敵じゃないと思った。そして、嫌いな支援者でもないなと。むしろ、私は語っていかないといけないんだと思った。必要なことや、やってほしいことを、自らいっぱい語らないといけないんだとはじめて思ったんです。

支援に「ありがとう」と言うのは おかしいこと

船越 大学に入り、さまざまな合理的配慮が始まっていったと思います。実例を聞かせて

もらってもいいでしょうか。

山森 入学したばかりの頃でとても覚えていることがあります。

ある授業の試験問題で論述が2題出ることになりました。僕は上肢にも障害があって短時間でたくさんの文字を書けません。先生にそのことを話したら、論述2題のうち、1題だけでいいよと言われたんです。

一瞬、ラッキーと思いました。でもそのあとにコーディネーターの顔が浮かびました。これは相談しにいくか？と思って、支援室にいった。そうしたら、それはおかしいやんけと言ってくれたんですね。

ここにいる皆さんなら分かると思うのですが、その授業の本質がどこにあるのかみたいなことを一緒にたくさん考えました。結果、2題を論ずるレポートを提出することになりました。

船越 そういうことを積み重ねながら大学生活を送ってきたということですね。そのときに気付いたこととか感じたことを語ってもらっていいですか。

山森 コーディネーターという人は対話をしてくれる人、そういう仕事なんだと実感していきます。



こんな出来事もありました。
1回生の前期が終わる頃にコーディネーターとの面談がありました。僕は開口一番「支援してくれてありがとうございました」と言いました。そうしたら、それは違うと言われた。続けて、「キミは、水道の蛇口にもありがとうと言うんか？」と。わけわからんと思いました。このあと一時間ほど怒られたんです。要は、合理的配慮は当たり前のことなんだから、ありがとうじゃないだろうと。でも僕は車椅子ユーザーとして19年生きてきて、ずっとありがとうと言ってきたんです。ところが、それは違うと怖い顔で言われた。

船越 ありがとうと言うのが当たり前のやり取りだったのに、一時間も怒られたって、ピンとくる人はピンときていると思いますけど、山森さんの担当のコーディネーターがなぜそこまで怒ったのかを山森さんの側からもう一度解釈して語るとどうなるでしょうか。

山森 一つは、支援を申し訳なさそうに受けることをやめさせたかったんだと思います。もっと堂々と必要な支援を受けていいんだという教育だったのかなと。水道の蛇口をひねったら、水が出るという例えは、それぐらい当たり前のものなんだということです。

船越 そうですね。そのぐらい自然なものとして、大学のリソースとして、われわれがいるということですね。

ロールモデルのいない教育実習

山森 教育実習にいかないと卒業できない課程にいましたので、教育実習に行くことになりました。そこで何が起きたかは、AHEADJAPANの協議会誌『高等教育と障害』の創刊号に論文が載っているのですが、今日はそこに載っていない話をします。

実習に行く前はめちゃくちゃ不安でした。何が不安だったかという二つあります。

一つは教育実習生としての不安、もう一つは障害学生としての不安です。

教育実習生としての不安は、何をどうやっていいのかわからないという不安でした。ほとんどの学生は先輩に聞いたり、学校にボランティアに行って不安を解消していくわけです。

僕も先輩に、教育実習では何回ぐらい授業したのかといったことを聞きました。でもそれ以外にも、板書ができないこととか机の間を回る机間巡視ができないこととか、障害学生としての不安がどんどん出てきました。

Googleで検索しても、車椅子の小学校の先

生なんて出てこないんです。車椅子に乗って教育実習にいった人もほとんど出てこない。めちゃくちゃ大きい不安を抱えていました。何かあったらどうしようって。

例えば、不審者が入ってきたらどうしよう、目の前で牛乳ビンが割れたらどうしよう、台風で学校が休校になったらどうしよう……とか。そうした不安をコーディネーターに話すと、「そんな実習で起きないから安心して行ってこい」と言われました。

ところが実習中、牛乳瓶が割れ、台風で休校になったんです。でもそのときに、ここは他の先生に任せないといけないんだって思ったんです。実習にいったそれが分かった。目の前で子どもが吐いたこともあったのですが、誰かにお願いして、僕は他にできることをやればいいんだって。役割分担をすればいいんだと考えられるようになりました。

船越 自分でロールモデルをつくっていったということですね。他にもどんな試行錯誤があったのでしょうか。

山森 すごく悩んだのが授業でした。授業ではスライドを使おうと思って頑張って準備しました。プロジェクターも準備して、これならいけるという自信もありました。ところが授業初日にパソコンが固まってしまいます。

ICTに頼っていたら、それが使えなくなったら終わるんだと知りました。

今度はプリントを使って授業を進めていこうと思い、プリントをつくって子どもたちに配りました。「書けた人からもってきてね！」と言うと、目の前に20人ぐらいの子どもたちがワーッとやって来るわけです。しかもプリントを集めただけでは意味がない。学んだことを子どもたち同士が共有できないからです。だから、最終的には書画カメラ（OHP）を使ってやりました。

大変だったのは授業だけではありません。子どもとの関係性をつくるためには遊ばないといけないんです。遊ぶことに関しては実習生はめちゃくちゃ得意で、とにかく外に出て遊べばいいんです。歩ける人たちはそれができます。でも僕はそれができないから、あやとりを準備していきました。

それで仲良くなれた子もいたのですが、みんなではない。だから、やはり外に遊びにいけないといけないんだと思って、気合いを入れて遊びにいきました。ドッジボールをしたのですが、最初に僕がボールに当てられます。僕は「チャンスだ！」と思ったのですが、その直後、当てた子が「先生ごめん」って言ってきたんです。めっちゃショックでした。

船越 山森さんの論文にもいろいろと載って

いるのでぜひ読んでほしいのですが、今回の話には論文に載っていないはじめて聞く話が多いですね。

実習が終わり、次は社会に出るステップです。

雇用率の数字にはなりたくない

山森 卒業後の進路を考えないといけませんが、教員という選択肢はもうありませんでした。

残りの選択肢として、民間企業と公務員、進学というのが残りました。まずは、民間企業だと思って、障害のある人の就活サイトに登録したのですが、毎週たくさんの電話がかかってくるんです。本当に毎週かかってくるんです。どうしてこんなにかかってくるのかとコーディネーターに尋ねたら、「おまえ考えてみ？国立大学卒で車椅子に乗ってるんやぞ」と。車椅子というのは最初のバリアフリーにお金がかかるかもしれないけど、それを整えたら大丈夫になるだろうと言われました。

それを聞いた瞬間、「僕は数字ちゃうわ！」と思いました。相手は僕を雇用したいんじゃないで、雇用率が欲しいだけなんですね。ひねくれている僕はそう思ってしまった。なので、民間企業にいくのはやめました。

それから、なぜ教員にならなかったのか。今

までは体力的にきついからと言ってきました。でも、それだけではありません。学校という環境が、障害のある人にとって非常に働きにくいということがありました。

そもそも自分がどうやって働くかをイメージできないところに、障害のない人との差異を突きつけられた気がしました。それで、いったんは教員になることは諦めます。

僕は研究もしたかったので、大学院に進学します。できるだけ障害のある学生が多い大学かつ、支援が充実しているところに行きたかった。それは、支援がないと困るからじゃなくて、面白い障害学生に出会って研究をしたかったからです。

でも実際に進学して出会ってみると、とてもおとなしくて戸惑いました。もう少し具体的に言うと、障害学生がやってほしいことを言わないんですね。

僕は大学の4年間で、お前は何がしたいのかと毎回のようになんて言われていましたから、みんなのおとなしさに驚いてしまったんです。そのとき、何かが障害学生をおとなしくさせているのだと思いました。障害のある子どもだとか、若者をおとなしくさせている構造があるんじゃないかと。それで、「援助要請の抵抗感」という研究をずっとやってきました。

船越 僕も関西で仕事をしたことがあります

が、関東と関西の違いというわけではないですか。

山森 それもあるかもしれません。特別支援教育という制度は一緒ですが、関西と関東とでは運用の仕方が違うという側面もあると思います。

ただそうしたなかで、すべての人とは言いませんが、できるだけ実現可能な選択肢のなかから選ぶということをしてきた学生が多いのではないかと思ったんです。

修士課程修了後の進路ですが、すでに教員と民間企業は選択肢になく、公務員が良いなと思っていたのですが、その頃に公務員の障害者雇用率の水増し問題が発覚し、消去法的に博士課程に進学することにします。

そこで考えました。コーディネーターや大学教員になったら、雇用率として換算されるただの数字ではなくなるんじゃないかと。一個人として働ける。それは僕にとって面白いことだし、比較的体の負担も小さく働けるんじゃないかと考えました。

船越 なるほど。ちょっとここで突っ込みたいんだけど、負担って小さいですか。

山森 どうでしょう。なかなか難しいところはありますね。

障害のある先輩コーディネーターもいますが、少ないですね。見た目ではわからないので、ほんとうのところはわかりませんが、コーディネーターに障害者が少ないというのはひとつの答えかなかと思います。

支援者としての挫折

船越 当事者でありながら支援者でもあるというところにどんどん入っていくわけですが、そのプロセスで感じたことを聞いていきたいと思っています。

山森 念願のコーディネーターになり、「山森」として働くんだとやる気だけはありました。「よっしゃ！権利保障するぞ！」と意気込んでいたところにコロナ禍が始まります。大学は混乱して、先生たちも障害学生のことを気に留める余裕がありません。忘れられた障害学生がたくさんいました。やる気だけでは権利は守れないんだと悔しい気持ちになりました。

当時は、肢体不自由や病弱といわれる学生の支援を中心にやっていたのですが、肢体不自由の学生はノートが上手くとれないので、ノートテイクの支援を付けていました。その支援が1コマ埋まらないだけで、「支援をつけられなかった……」としんどくなっていま

した。

その後、辛いながらも頑張って経験を積んでいきますが、だんだんと当事者としてどうにかしたいという思いが小さくなっていきました。支援には限界があるんじゃないか。そんなことを思うようになったんですね。

皆さんもわかってくれると思いますが、権利を守るなんて簡単にはできません。今度は言い訳を始める自分がいました。大人ってずるいですね。さらにしんどくなっていきました。

船越 学生の権利を守りたいと熱意をもってやっていたのに、大学という組織では人や予算の面で限界がある。大学側の視点でものごとを語り始めてしまったということですね。一番悔しかったことは何ですか。

山森 例えばですが、全ての授業で手話通訳をつけてほしいというようになかなか実現が難しいニーズが出てきたときに、なかなかそうはいかないということを歯切れの悪い言葉で話していたことですね。優しい顔をした支援者は嫌だと言っていたのに、いつの間にか自分がそうになっていたんです。それが一番悔しかった。

船越 そうだね。次はそれを克服していなくてははいけない。それに向けた答えは見え

てきているのでしょうか。それとも今も感じたままなののでしょうか。

山森 明確な答えはまだ出ておらず、いまでも悩んでいます。

徐々に障害のある学生を言葉で説得することが上手になってきました。「こう言えば法律的に大丈夫」ということがわかってきた。もちろんそれは支援者がやらなければいけないことでもあるのですが、ただ説得しているだけなのかもしれないと思うんです。言い訳をしているだけなんじゃないかと。

お金が無尽蔵にあればなんでもできます。けれども実際はそうではないので、対話をしながらやっていくしかない。でも対話もきちんとできているのかどうかがわからない。それがずっと感じていることです。

それから、僕が優しい顔をしたらそれは最強なんです。当事者である支援者は、それだけ力をもっているわけです。だから、葛藤は続いています。話がきれいにまとまらなくて申し訳ないのですが、ずっとこの葛藤はもち続けると思います。

障害学生の権利保障をするために

船越 僕自身も、どっちを見て仕事をしているのかと思うことがあります。そういう葛藤

は、ここにいる皆さんももたれていると思います。そんな皆さんに向けて何か言えることはありますか。

山森 えらそうに語る自信はないのですが、僕たちはサラリーマンです。給料をもらっています。だけど、僕たちがやっていることは、障害学生の権利保障です。権利を守るために給料をもらっています。大学に所属していますが、決して大学の都合を障害学生に納得してもらうために雇われているわけではありません。

ただ、一人でやっていくには難しいこともあるだろうから、こういった職能集団であるAHEAD JAPANに来て、いろんなひとと繋がって、どうにかこうにかやっていく。そのために今日は皆さん集っていると信じています。

船越 そうですね。今日是对談相手として、何を引き出して、何を語ってもらうのかをずっと考えていました。また、AHEAD JAPANがもっている意味も考えていました。

これは僕からのメッセージでもあるのですが、支援者は支援者としての当事者性を失っていないかということを考えたいと思っています。今日の山森さんの話を聞きながら、支援者が支援者としての当事者性をもちながら、悩み、葛藤を抱え、それをぶつけ合う場所が

対談スライド資料25頁より

- どんな支援を必要としているのか
 - ・ 権利と機会を保障することは、当たり前
= 大学や支援者の都合を優先させない支援
 - ・ 支援者がレールに乗せることは支援ではない
= 既存の支援や制度ありきの人生に押し込めない支援
 - ・ 障害学生を「おとなしく」させてはいけない
= 障害学生が、臆せず自己決定ができる支援

AHEADJAPANだと思いました。

AHEADJAPANの大会も今年で11回目になりました。第一回目のときは、もっとわくわくして新しいことをやるんだという思いがありました。けれど、徐々にルーティン化するなかで、いろいろなものが整っていくなかで、フラットになってきている部分があるのかなと思うんです。

今日、山森さんが語ってくれた葛藤をみんなでシェアしながらぶつけあって、前に進む。昨日、大会実行委員長の村田さんからメッセージが来ましたよね、その中でも触れられていましたが、われわれが支援者としての当事者性として何を受けるのかが問われていると思います。

山森 も今日はいろいろな思いをもってこの会場に入ってきました。まず思ったのは、人が増えたなということです。AHEADJAPANができた当時から障害学生支援の雰囲気を知っていて、国立大学の対応要領ができたタイミングで僕自身は大学生になりました。それをつくっている人たちの目が血走っていたことを覚えています。

ずいぶんと人が増え、これほど大きなホールでやるとは思っていませんでした。制度もできてやるべきこともわかってきた。でも、船越さんが言ってくれたように、はじめの頃の熱量はどこにいったんだろうと思うところもあります。

何度も言いますが、僕たちは権利保障のために仕事をしている。あるいは社会を変えてい

くために仕事をしているので、そこは忘れてはいけない視点だと思います。

最後に、ここが一番大事だと思っている三つを載せたスライドがあります。

一つ目は、権利と機会を保障すること。水と空気ぐらい当たり前のことです。でも、自信がなくなるときもたくさんあります。リソースにももちろん限界がありますが、それでも支援者の都合を優先させてはいけないと思います。

それからもう一つ。これははじめにも言いましたが、学生を支援のレールに乗せることは支援ではないと思っています。学生が無謀なチャレンジをしているように見えても、僕たちは付き合わなくてはいけないし、その責任があると思っています。

いろいろな制度や法律ができてリソースも増えました。でも、リソースありきで人生をつくっていくわけではないんです。先にどうしたいかがあって、そのために何が必要かを考えたときにリソースが使われるべきです。

それから最後。障害学生をおとなしくさせてはいけない。僕たちは、障害学生をおとなしくさせる言葉をたくさんもっています。でも、おとなしくさせてはいけない。そのためにはやっぱり僕たち自身がおとなしくなっていくといけないと思います。変えなきゃいけないことは変えないといけないし、進めることは進め

ないといけない。

支援者のマインドとは

船越 すごく思いのこもったメッセージを最後にいただきました。フロアにいる皆さんにもお話を聞きたいと思います。いかがでしょうか。

大野 京都橘大学の犬野といいます。すごく刺さるような、貴重なお話をいただいたと思っています。ありがとうございます。

一つ質問です。「おとなしくさせてはいけない」の受け止め方なのですが、山森さんとしてはどういうマインドセットでいることが大事だと思われますか。

私は心理士なので、カウンセリングやサイコセラピーの現場でハラハラする気持ちを抱えたり、わからないことをわかったようにしないとか、巻き込まれることから逃げないとか、そういう表現になると思っているのですが、山森さんの感覚を教えてください。

山森 僕の感覚と言っていいかはわかりませんが、今日ずっとお話ししてきた僕がはじめて出会ったコーディネーターが「われわれは側につきっきりではいけない。ただし、何かあったときには走っていける距離でいないと

いけない」と言いました。

僕はそれぐらいの距離感でいることが大事だと思っています。転ばぬ先の杖になってはいけませんが、大怪我をさせてはいけません。回答になっていますか。

大野 はい。その話を伺っていると、心理学でいうアタッチメント、もしくはCircle of Security（安心感の輪）という概念に似ているなと思いました。

放ったらかしではいけないけど、探索している子どもの様子を見るとか、不安になったら受け止めて、受け止めたままじゃなくて、出ていけるように距離をとったりすることもあるわけです。そういう発想は、具体的にどういう場面で取り入れられていますか。

山森 僕がコーディネーターとして一番嬉しい瞬間の話をします。

それは、障害学生が友だちと楽しそうに過ごしていて、僕に気が付かなかった瞬間です。その瞬間は、支援が上手にまわっている瞬間なんだと思います。

僕に気付くのであればきっと何か困っていることがあるからで、支援や合理的配慮が頭にある状態です。友だちがいないといけないわけではないですが、楽しそうにされていて、僕に気付かなかった瞬間というのが僕にとって

は最高に嬉しい瞬間なのかなと思っています。

お答えになっていますでしょうか。

大野 ありがとうございます。100%共鳴する部分だなと感じました。ありがとうございます。

船越 皆さま、ありがとうございました。

登壇者プロフィール

山森一希（やまもりかずき）

大阪府出身。脳性まひの車いすユーザー。小中高と地域にある通常の学校で学び、2014年に大阪教育大学に進学し、特別支援教育を専攻する。在学中に小学校および特別支援学校での教育実習を経験する。その後、筑波大学大学院で、身体介助を必要とする肢体不自由者の援助要請研究をまとめ、博士（障害科学）を取得。また、2020年の博士後期課程進学時より、筑波大学DACセンター及びBHEにて研究員として着任。障害学生支援業務を経験し、2024年3月から大阪大谷大学 障がい学生支援室<アクセスルーム>にて、学生支援コーディネーターとして支援業務にあたる。

主な業績は、『肢体不自由学生の教育実習参加に関する実践報告』（平賀・池谷・山森、2019）。



船越高樹（ふなこしこうじゅ）

東京都出身。NPO、公立小中学校において特別支援教育関連の教育実践活動に取り組んだ後、2012年4月不登校対応の星槎名古屋中学校の開学に従事し、2013年4月より教頭。2015年4月より岐阜大学の障害学生支援体制作りに取り組む。2018年3月京都大学学生支援センター障害学生支援ルームに特定准教授として着任。文部科学省、社会で活躍する障害学生支援プラットフォーム形成事業により設立した『高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）』でチーフコーディネーターを務める。2020年4月国立高等専門学校機構本部特任准教授／学生参事補／障害学生支援スーパーバイザー。2023年4月筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局研究員、同年6月より准教授。

